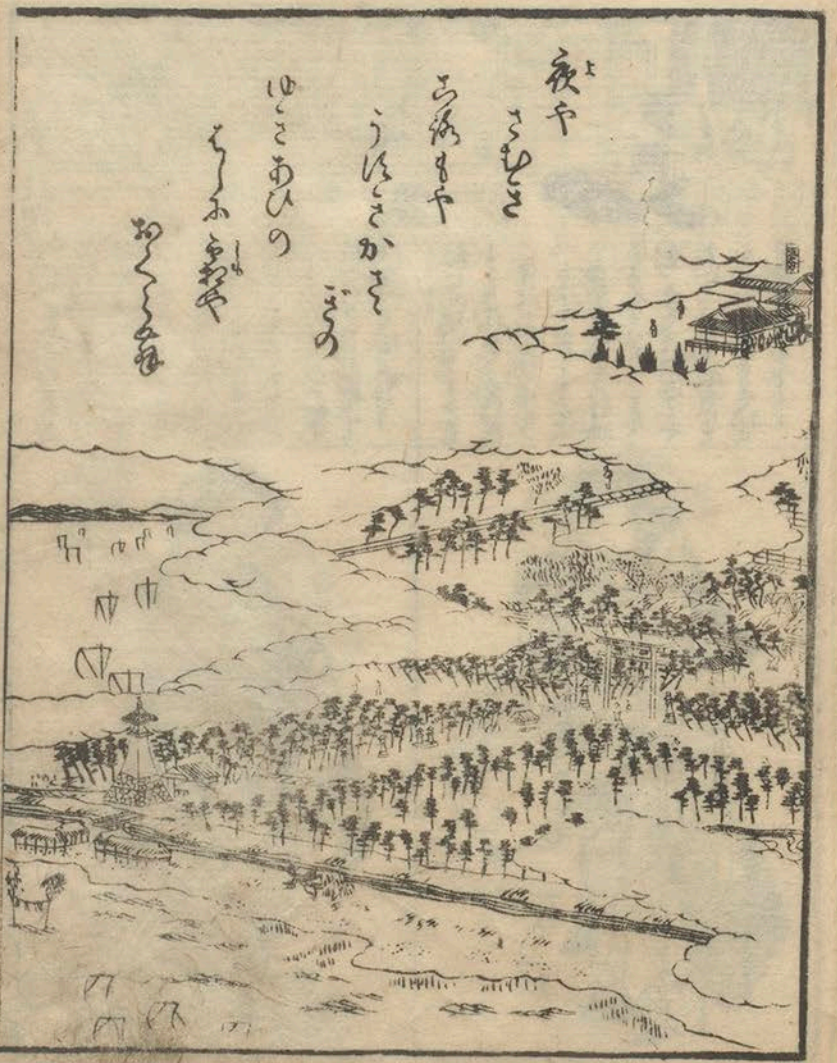
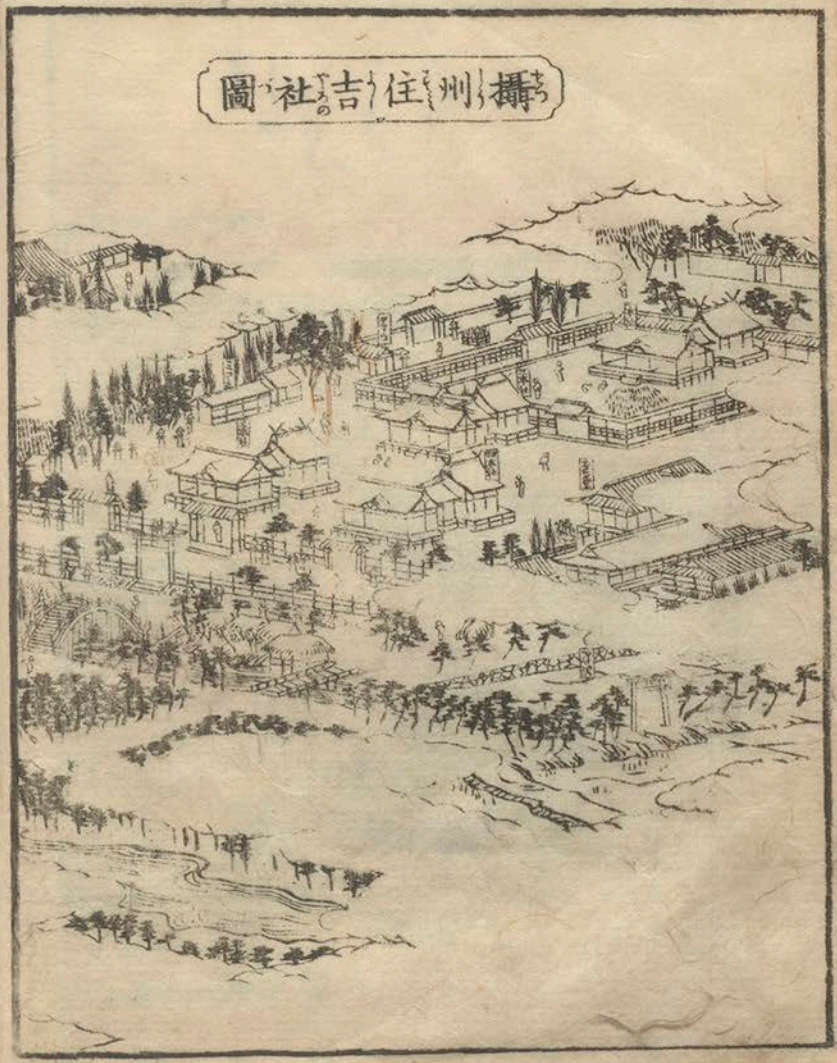
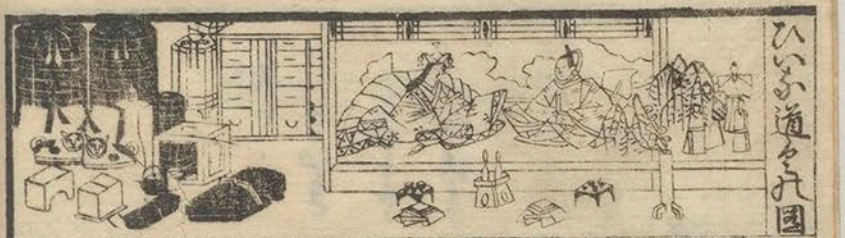



長門今景朝





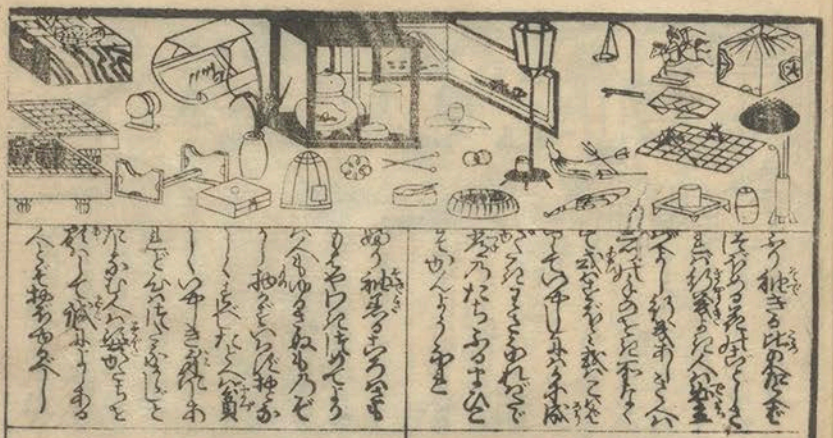

攝州住吉社圖



ひいふう道々孔圖







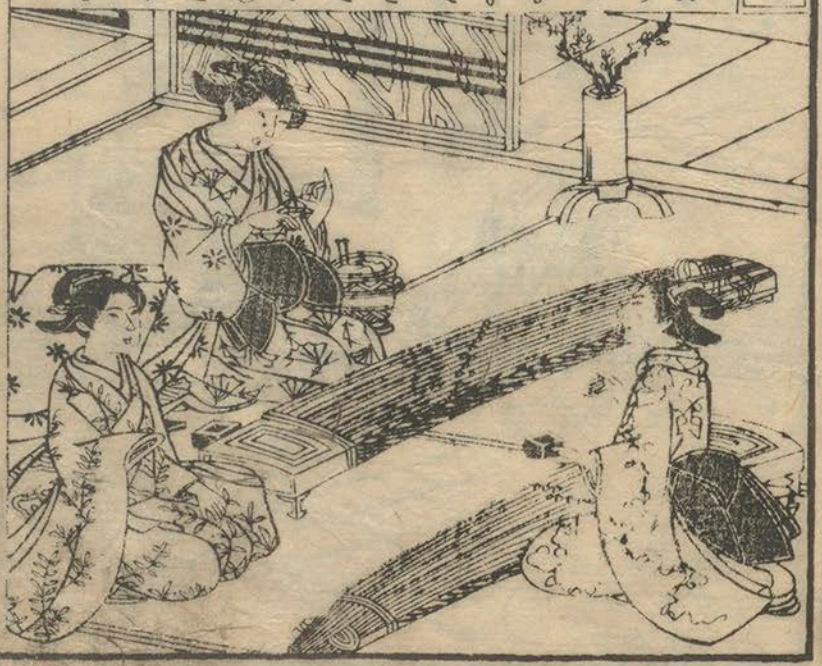










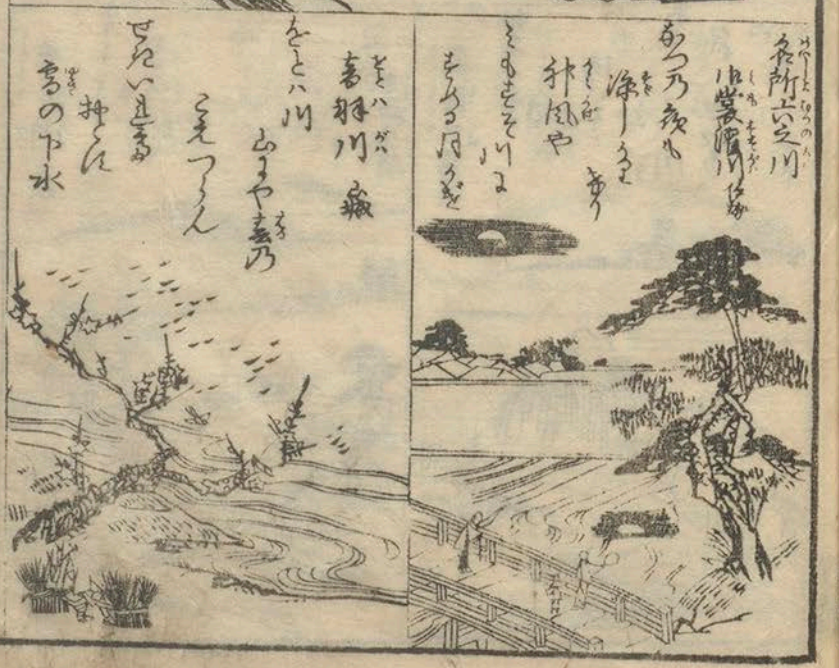


婦養子業教草



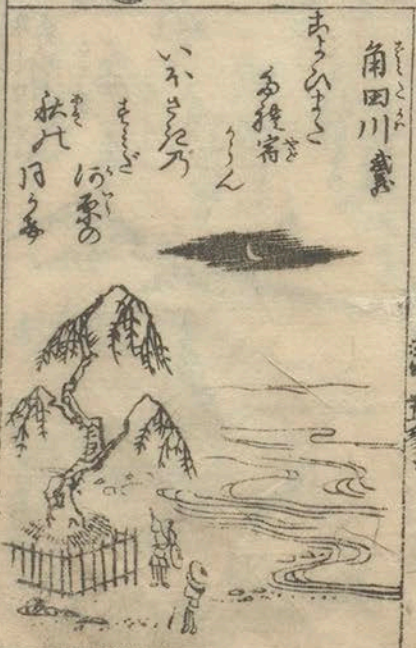


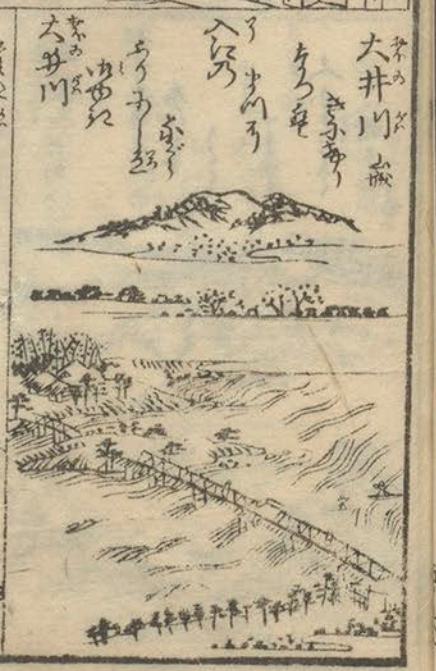



名所尽之内
佐賀濱川
あつ丸も
浦一うら
朴風や
きもそれ
きる月を
吉野川
をとハ川
ふるや吉乃
そそいん
ながれ
吉の下水















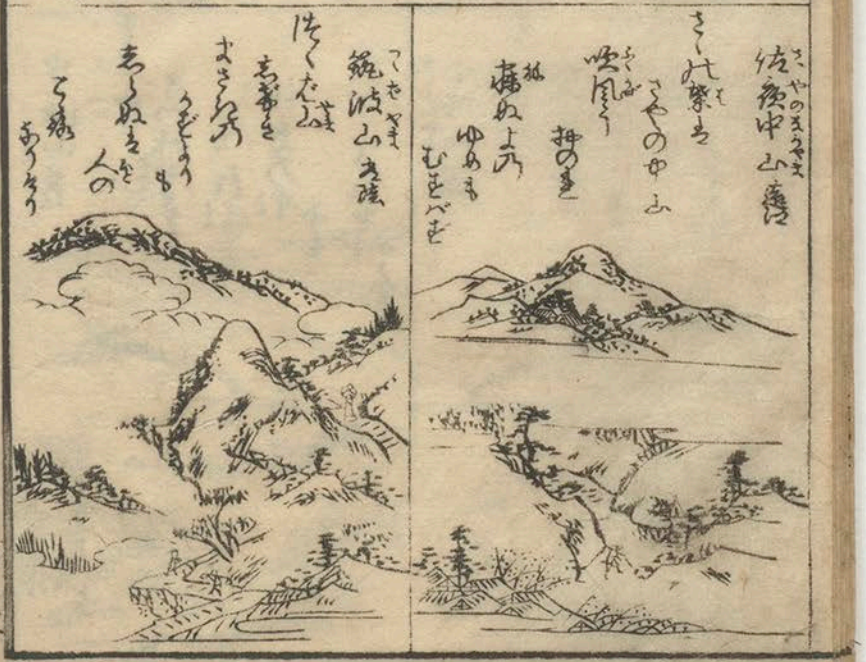














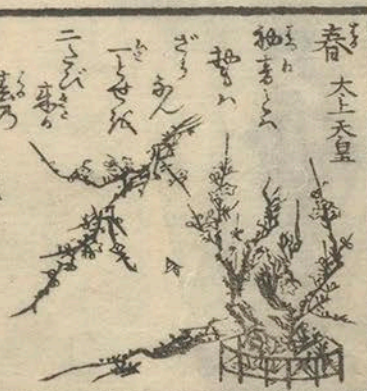
揚子江を玄宗皇帝お庇ひて
夫より馬人となり幸ひ給ふ浪
まくのまもうふくみそなひ
給ふのつゐでに絵ばなしを
聞ませうと云ふ事ゆゑ
ばん頭「こゝぶれとの〳〵人なれば
下うまおひるまもねず
揚子江
ねとうや越てきふ海
越ぎり〳〵者そひめしぐるまぶ
つゞもぐさの第一なり



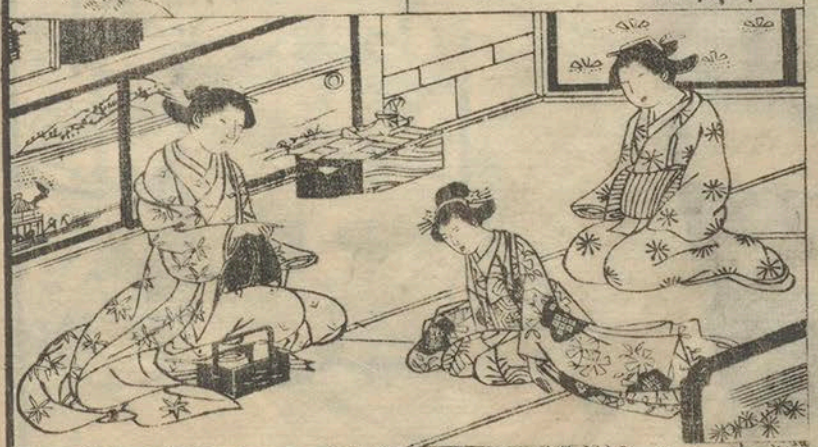
あるゐはんぶくやうの
まゐりくさ
まもうそうで
ひやうめしあがれと
ゐなかのうれしがる
そうな
あいさつのうまい
ばん頭
ぎやうさんの方
ゆだんなく
のみくらべとれ
賞ばんをあけて
おめでとうござります
ばん頭「ござりまする
て参らせ
ます「汁菓
ろうえんも其ほかく
右のそなたうの
ようにござります

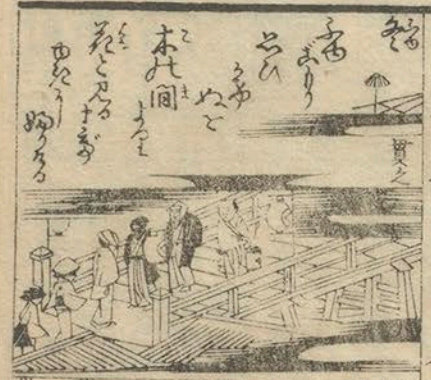
皆さまへ湯乃武帝が伝てう
あいさつをなりしてあいしやう
湯乃武帝「ござりまする
番氏焼せたまふ
内「ござりまする
でんぐさうの絵よりも
ござりまする
まいりまする
ござりまする
まいりまする
ござりまする
まいりまする

春 太上天皇





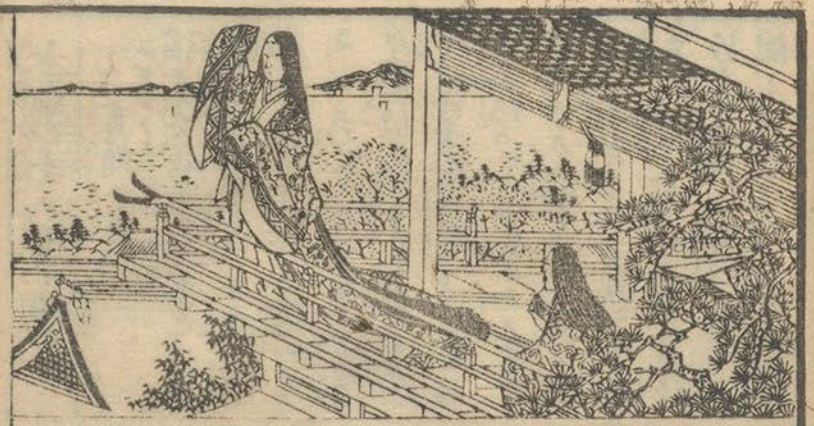




秋







女大學

一吏女子の成長

しるに他人のあく

約束始て

仕るそのなるまで

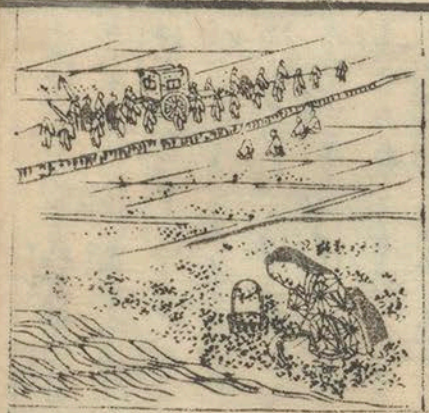
男子よりも親

吉備兄嫁

備前國何某の女也やどうく嫁行てより小言ばかり言て姑をそしりうらみ兄夫婦をもかろしめて或日兄夫婦の方へ行て暫く逗留せんと云ふ兄夫婦是を聞て大に驚き妹の心底を察し種々異見を加へ其上にて妹を送り遣しぬ



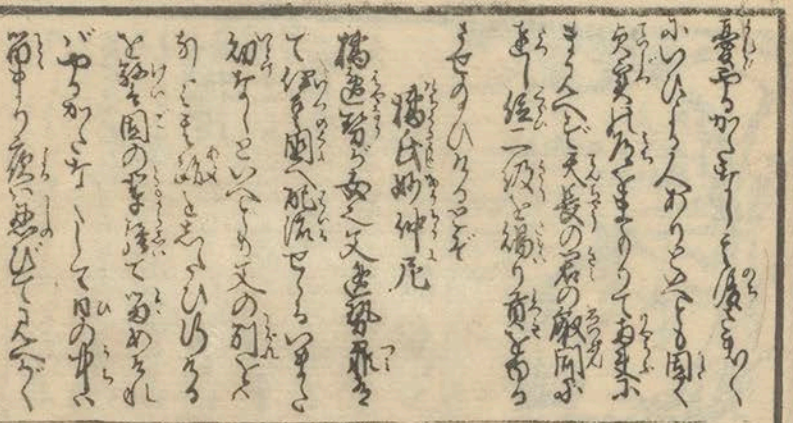
また又い驚て海
平きまで追嗚
呼ひ驚と腹痛て
中氣くなりく
終には逝去され
私を勝手女ゆへ又







其夫あるを別を心
ともとべとなりと
時の民家いはれの
法を知らべて知
と礼みて名と稼
親迄分そ尊を



あらく一生を
尊ふをもおもひ
慎さ事よりのぞや
女を父母の命と
媒妁とをおろそれば
交らびと軽まびと小



学ぶことなくして俗念
あるを失うものを
金石おくよりも
して多きを
一時人もて
をわが家とする

富士の嫁となる
ものは家内
多きを
いかに事
繁き
とも
至らざる



ひとうちの貴女ちゝと
て逃げ去るの人を恵よ
つて越後松山孝女
越後國松山侍家の女い幼
して父母に孝心厚く病の侍

の人を取て養ふ家
仕者函有ること
おそひ一度娚て
其家と出ざると女
のみとをること女へ
聖人の訓なり若

ひとうちの貴女ちゝと
て逃げ去るの人を恵よ
つて越後松山孝女
越後國松山侍家の女い幼
して父母に孝心厚く病の侍
の後とゝのへて逃去ぬ
ちゝ人情紙の如く
て逃去とゝ
こゝ
ゆゑ
弥
そ
そ
そ



母の為にしんぜうもうす
ひの母ふわうびてうろれど
姫起てていよ〳〵をかなうも

母よりみやうのかいくわの
栗とうてもろうもとおも
もう年寄の母まのうん
ゆうとうらくいたとう

子すれ女とも去べて
乞食と乗いる孫
相撲乃為なれども
拾もども婦人乃ん
平く汐儀よく
して如もあなくも

さびとも同姓のみ
と善人為一家は
あよみわ〳〵ば書う
子ろくた主よなびた
三の涙乱なれど
さ余宝よの格気ず

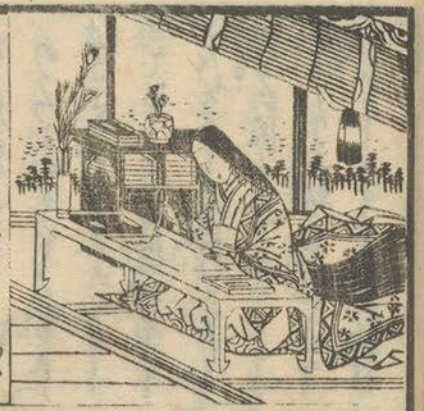
ケーえてもあまとおつ
ぞすべ
義孝孫次妻
義孝四のそこら村よう
婦そ夫の娘え母老ろ
病あり治しう家びし
ろかよ海もあ新妻へ今
房ろびれめとのそ母
老ろとおーまうまを
求めてうれと脇せめ今妹
と許よいのうそもおーとへ
ども父母うやひりてケそ
共家本いへべの主何ものう
さ句と代まの帝に奏すロウ





富貴は夫と嫁をもつ女の道よりあづかりて大切なる身なり一女子いとおろかなりてい家父母より当家嫁をとらば夫乃家うしなひてい当嫁をとらば私よりも重んじて尊く思ひ孝行を尽すべし私の方を重く軽ま

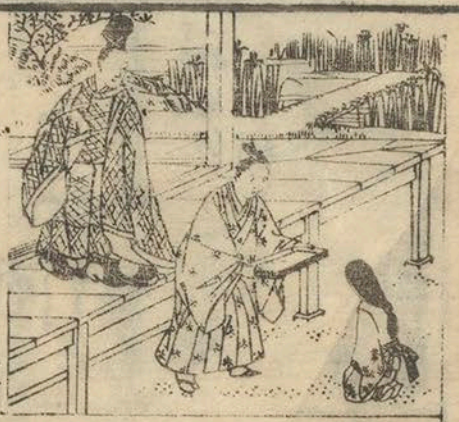
小説おもしろくよみたる二六
戎机よりそう人てきたくのと
とたのくりりて私人おりれ
こて為ざ私を清出しまん
して私の頭髪をかみおらこ
不の海士も長ちうとのこ様
一のうちゆとうんこ銘まと
ま清して養育ふ
づ一部の後年ふまつべ
大賀二位
右ハつれ夜宮参のおりて
妙ハ紫式部ハ宮本武蔵
幸村ハ幸ハ村ハ清ハ陳ハの
ハ乳母ハまつのたるうり二位



ずるこゝろの婦乃
あれ勤夕のこゝろまひ
と願べくば婦のあれ
勤べき業を怠る
ことべくば婦まこと
命あらば怠りて肯

べくば男のこと當姑
よ問て其の教を仰
そべく當姑うへ
と慢と雖のこゝろも恐
姑をよくおもふこと母を
はゝそして孫をとりつゝ





昨夜の思ひ
その人を逢べく次
女も夫をそむいて
天とともにもぐも夫
に逢いてそれ前を
更べく次



暫くそれに嫁の
んことを姑と父娘と
釈迦と稽首まのべ
清吏吏者兄嫂と
雷くうやまへべる
吳姉と同くすび

一嫉妬れん嫁く
殺をべくび男嬰礼
なくび懲る忍
怨べくび姑をまた
こと言色おう集こと
忍べくく

あて御使のすくびんをまて
ていふ御ふみの上包をとりてひ
ひらき見るにかきつけたる
たらちねの御袖いかにそうあ
そて盛遠ふみをすてかりそめ
やうにせうつのつまこもへね
もろもろの御のいそのかみ
おそうとうつまつて
かりそめ後よもひねよ
うくでひめうり
うくへ来ありそをひて
うふ関よものびへまを
ひらき見つ
そんくの関ふみをひらき見
とのまふみをひらき見
ふみの上包のごく
ふみをひらき見
いりそんくの関ふみをひらき見

そべうび御ふも人を
御書御ふと云へうず
人の詠を吟ずとこゝろ
ぐんよ御そ人て
御へ御ふびうび込と云
つまよりて新敷ふも
岡ふくなり
岡ふとをひらび
一女のそんく遣
くそ文と書く
御ふ護ふべ御ふ
早く都へ遣く

寝巻ういろ
へ茶団子事
心を用ひ織縫
縄無るべくび
茶酒など多く呑
無くび寄妓



小欽浄瑠璃
茗溝さらい事
寺など都て人
おつくおつまる
へき半嶺より団



家紋ある羽織
傾城に貢を化
廓にて衣服飲食
ともに男名を
書ること勿れ

一茶ものゝ美
新敷友達下紙
男みい
ずに客をもてなす
乃隅を開くべし



家を勤め次に家
祝の事をはじめ
皆一度の休ミ
みな何方へも行
べし次に私よ人も
そのをべかし
次

きるを用ゐべし
一家の内新年
に私事乃方
新年を次をべ
からず正月元旦
をおもに

一女我親の家
をいづる縁を男姑乃
記を建ゆゑわが
親よりも婢ばた大
切に思ひ孝行を
尽して嫁してなほ

わが親の家にも
来を奉るべく
婚礼仕の家への大
形も倹を守りて
善悪をえらばず丈
夫親をよく



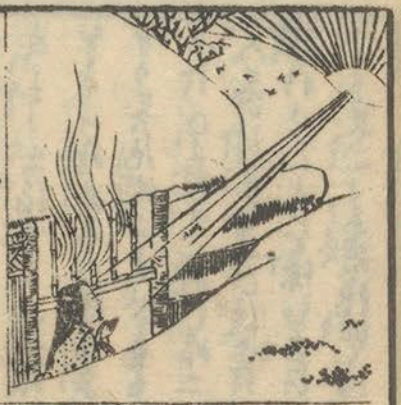
修て贋うるものならび
一下記置事
一諸事自幸営を専ら勤ること
一女の作法

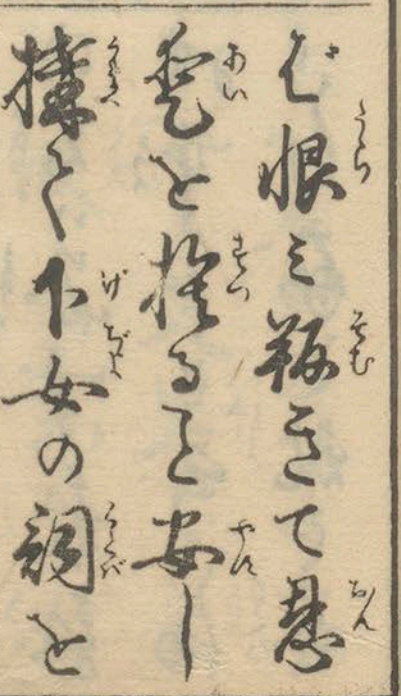


又思ひうつて我父を殺しけれ
かゝる我人故父と殺さるゝ
孝我ゆゑ父を殺しつみ
我を殺さんこゝろざしにて又ゞ
画を取りかゝりて殺しび
きに殺して仇の討殺
報得物と見えてやすく
櫻そ木へ出べくば
一下女と生えそ
仇はそらも面一
云甲斐なきか下
籠も無一面くそ
者恵那くも好者

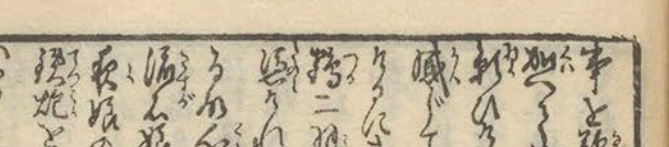
物ふこと祥月
支ゝと當姑姨
其ことなど永ん
合ぬるあまい櫻
そ後時ちそ
也ゝ那る君

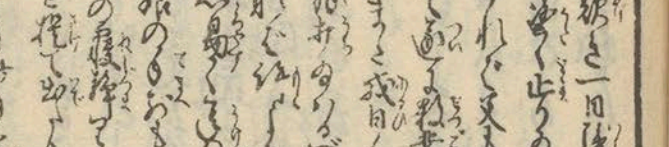
竹氏春女
越後蒲原郡村の春女竹
氏の女幼うして父母
あらはて孝あり江戸
八重のゝ花ゝふまり
て女ゝ去滴よ飛りて
姫ありさればふ國のこゝろ
てそ私とひ〳〵富春と

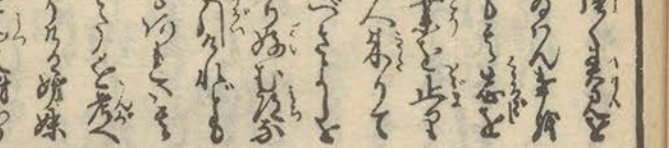


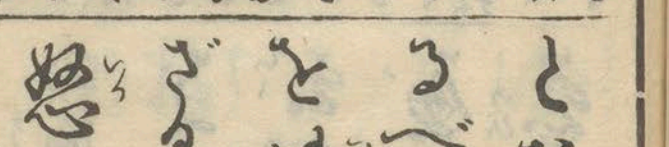


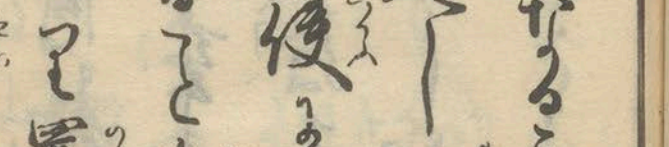


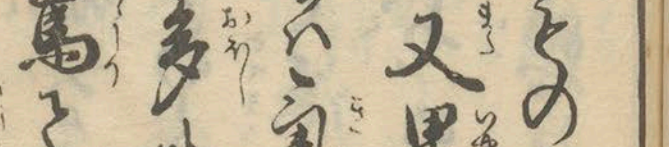


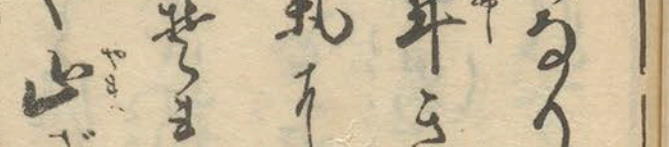


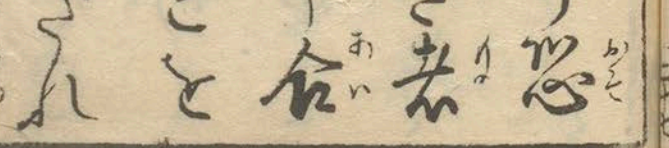








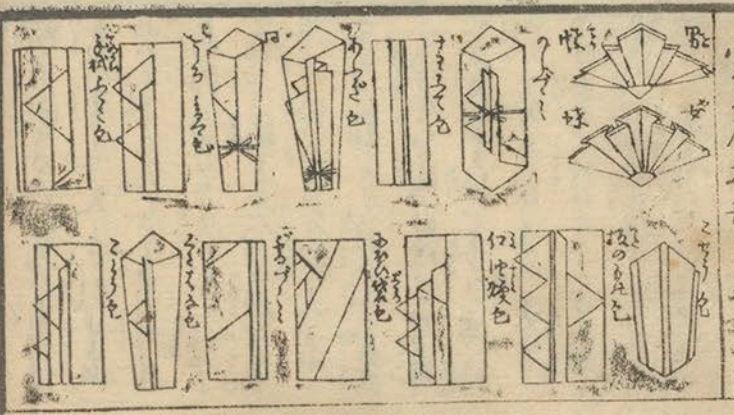






但家に入ては
よく用ゐを主ぬ
者そみざりよ無
くしび
一元婦人乃如
の悪き病いわざ

此ざると無如と人
を持る者如と
智恵淑きとかう
ふ疫ハ十人よ七
ハいわり老婦
人の男そ及ざ



小笠原折形之留

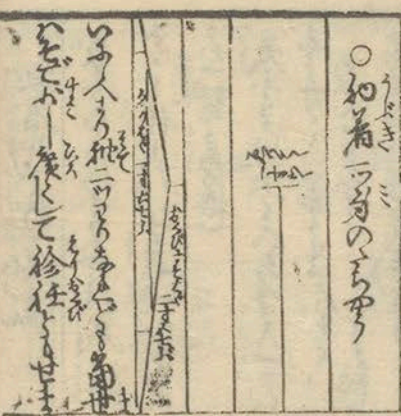
ぎまをかうり自
頭飛て改去べし
中ごろを船恵者
淫らあそみの夜
を殺る女い陰性
なり淫を取りて

衣ごとたつふるまひ式法
あると孤もたゞし音を喝へ
ろ一切のさろは
天ぐくの地ぐくの多まん一ろ
ちくくの多まんそく
三べんこうまく
ちやうの〳〵とぞ
この呪のそうもそそろう
あ呪の表ばかりを
ろあでふろうびます
ほらほあひれやの表を
あこのろ九今そろう
女のそろいのぐ
ぐのぐぐ
○あざりのことまの〳〵

晴一所に女い男
て汚ふよ悪うて
風ふる〳〵死こと
とを知らび又人
の離るをさこと
も奈へわざま

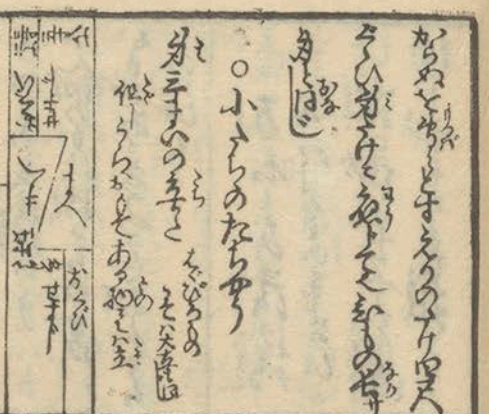


○和箱二分のもち

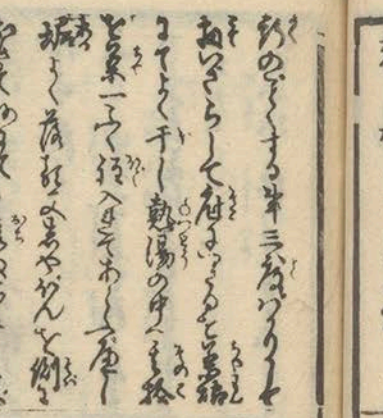


○小さらのなかもち
分三すのもち
そのうちの
一つらをあるあるじ

○中立のうち

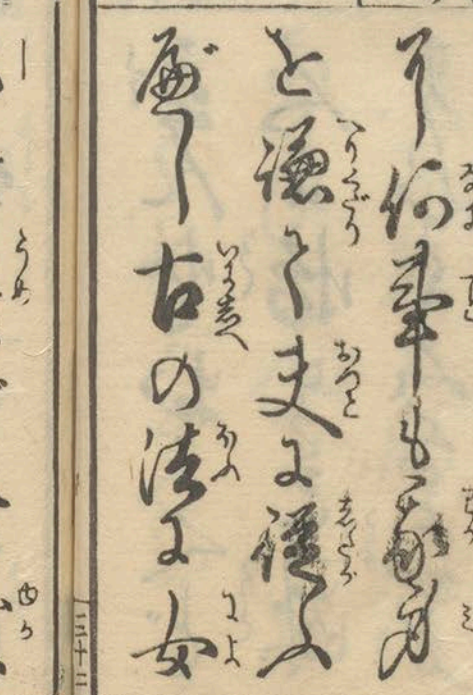


そで

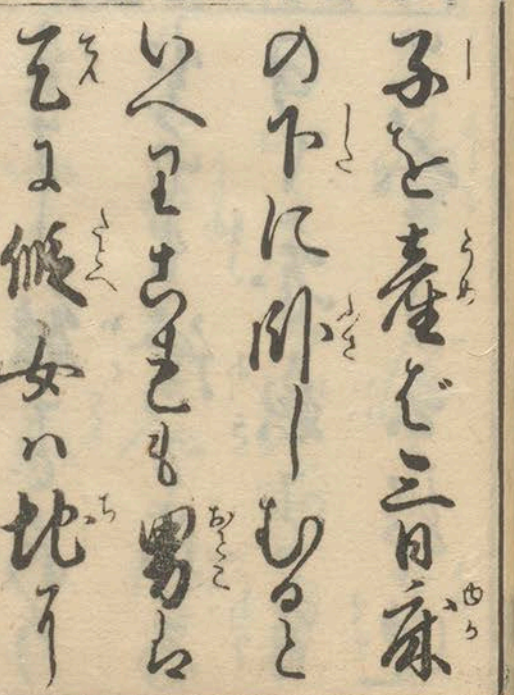


○のしめ元旦祝儀のすんだのち礼廻りの節
もってあるべきものなり

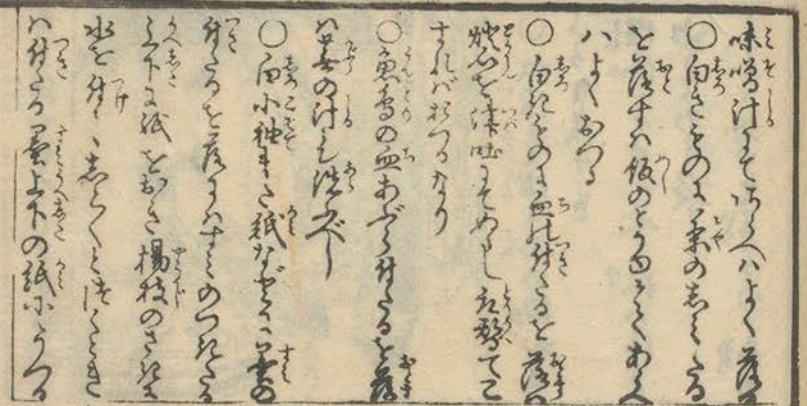
○万歳の義は
年たくさんのまわり
○小神の義は
物うりなどの上ること



○建国の祝日は
つまり始めのかう
なるべき事なり
陰気の形とて油のごとき血
出ずるゆえ
もし義理もなくもべきこと
久方ぶりにて会ひ



とそを五分ばかり
湯あり我ものをおと
とり紙をあり
ぬりても塗るもの
よく赤黒をまぜ
てくんぬり云おく迄



そうおのくくんぬりおかる
又方　まをつく灰をおの
くくんぬりかるゝと大熱牛も
火かゝくとも伏てしまうと分る
もあり
○衣流し血の分るを落す方
打身ゝ血の分りたるものは小の
ようおうをとるをよくしてそ
ゝ本体の実ゝ所をうち掛くべ
しよく落る
又方　血ぶきを裏と多く
てふき去ゝ血ぶきをよく
つるかり
○衣服ゝ膝の分るを落す

味噌汁をそゝろくへよく落
○白さゝのくゝ葉のあくるを
と落す仮のとるくくあく
ハよくあり
○白ぶきのゝ血分くるを落
然ゝをゝ煮ゝそのしれ絞てて
すればおつるかり
○ゝ黒豆の血あづく分るを落
ゝ茶の汁ゝ煮ゝ
○白小袖ゝ紙なぜゝ書の
分るをとるゝゝのうとく
ゝとゝ紙とあるゝ楊枝のさゝ
水を分ゝ、ゝくゝをにくゝき
ゝ分るゝ景上下の紙ふうろ

も湯をしてつよ
あやまちなからん
ゝ重くゝ人ゝ湯を
ざるやうに気を
敬又人ゝ傷をても
くゝも横ゝ



○紅深く塗ばよき湯の湯かげんよろしき方千万
悪湯にそすべべし抗ひ浴ときは
必ずおそれ物ともの

おく新婦を迎ふるの
おそれ恥べし
仏神に詣るの外
女子をみだりに出すべからず
おく連そひて家の

○向ふ脛つきなどをおこすに
よき大根のおろし汁をそゝぐべし

○茶のしぶを去る千方
水ふる灰をもて洗ひ去る
水をもつて茶ぶきを去る
○柔ものを去る千方
酒をもつて茶ぶきおつるべし
又方なまり水をもて茶ぶきを
白くなるべし
○衣服に墨の付くるを去る
まへ灰を紙に包みらの
付くる上をもつて押さ

うち根なるべし
おく僕おく雇ふ
時よりよく仕べし
又書付ておくべし
後悔先に立ずとは
なるべし今代

其人女子衣服
乃至など おほく
與へ婚姻せしむ
るよりも此事を
能をしへること 重
き を保寧なるべ

古語に人よく百
年計を出して女
子を嫁をしむるこ
とを勧む十年後を
おもひてこれを押し
ふせ勧むべし

あらくる桶こゝろみて綿を
こゝろをはかりて押へ桶を
ぐくぬうべし
○襟あはせの仕立をよく
すぶ形のごとくに仕立べ
きなり
○衣服よく仕立の分る
綿のぬうやうしろうへむよ
ぬうべし
○衣服よく仕立ると云ハ
ふくらかに仕立すり分を
ふくらかに仕立ぬひ目
まくをいふ
○着ざるやきものうすき方

堅き角とりのごとくすべて
ぬふべきなり
又布切のよきを取て
事ふ形すべし布の
よき ぬい人形のむすめ
着くる綿のごとくぬふ事
きりのごとくす
○又布切とおなじきやう
ふくらかと云つまり形
事ふ形すべし布の
よき ぬい人形のむすめ
着くる綿のごとくぬふ事
きりのごとくす
○又布切とおなじきやう
ふくらかと云つまり形
事ふ形すべし布の
よき ぬい人形のむすめ
着くる綿のごとくぬふ事
きりのごとくす



天智天皇

秋の田乃

かりほの

庵の

苫を

あらみ

わが衣手は

露にぬれつゝ



○又有家のわらひ particle を

いさせわすれ草のしげるを見て

千ゝ世わすれ草のしげるをも見

ときき又かあるらんと詠

めるべし

○又よみ人しらずの歌を

かり物語てや繁こゝろ

入まさるべし

○あるがとそひろうあるを

と砂をぜんひんあつ

まるく石榴のほとせん

さゝひんあつまるべし

ちらばらばらかうめかう

○洗の外ろとかそう

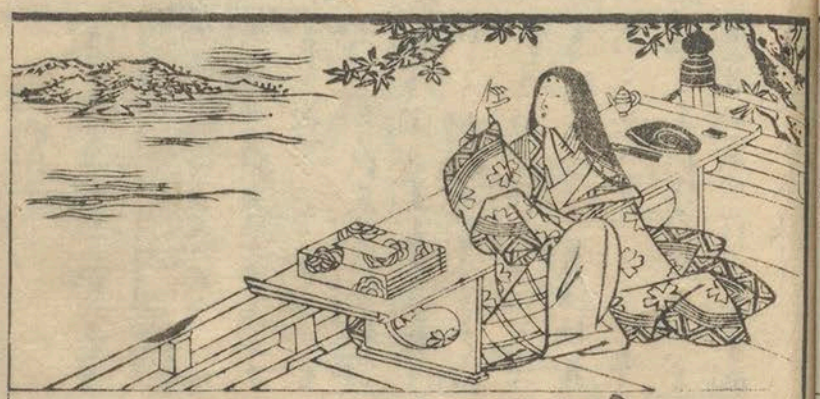
いへど紙のうれ女

子見れ共しらぬ人迷程

と知ぞんぜぬ

ものなるべし

蓬軒貝原先生述



紫式部

紫式部ハ上東門院ノ女房也
ハヽ光ハ源氏ノ名ヲ書給ヒシ
ト云ヒ伝ヘタリ石山寺ニ源氏物語
ヲ書給ヒシ硯ト称スル物アリ
ソレトヤラン一條ノ院ノ
御乳母ナリシ上東門院
ヘマヰラセシ頃ノ事ナリ
ユクスヱノ菊ノ露ヨリ
ソヽギテヤ光タマフラン
ソノ後一代ノ奉公ヲ
ツトメテ世人
ノ称スルトコロナリ



持統天皇

春過ぎて夏
きにけらし
白妙の
衣ほすてふ
天の香具山



柿本人麿

あしびきの
山鳥の
尾のしだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む



小野小町

浮世を変れば変る歌をおも
ひ出すにも今一誠よむべう
小野小町も衰れば姫おそ生涯
の盛衰されおくり身みう
衰を悲やし、あう盛るにも
大方なり〳〵其業れ面影の
眉深園も書き多共頼う
おこう玄園の老女見えく和
歌を詠ず扶風月と迷へ
為詩を吟ず箕裘を舞
ひさまよくなりし紀氏
放まつ孤独の身と衰へる
盛者必衰の理う天う永
絵へまあるべし



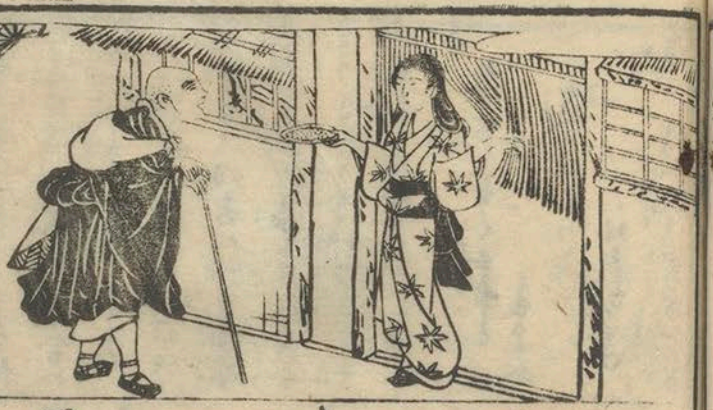
やまべの赤人

田子の浦うち出て
見れば
白妙の
ふじの
高ねに
雪はふりつゝ



猿丸大夫

奥山に
もみぢ
ふみ
わけ
なく鹿の
こゑきくときぞ
秋はかなしき



西行法師
西行ハ多門院ノ小侍従ト
云名人ノ聞エアリ
出家ノ後ハ多法名円位大宝坊
ト号ス信州上田ノ一揆ノ
逃ケル田中ノ一郷ヲ
下サレ泥益ノ為ニ
立置シ事ハ西行
法師ノ女房ノ髪ヲ
剃リ
ソノ
ノ
ノ

津守國基

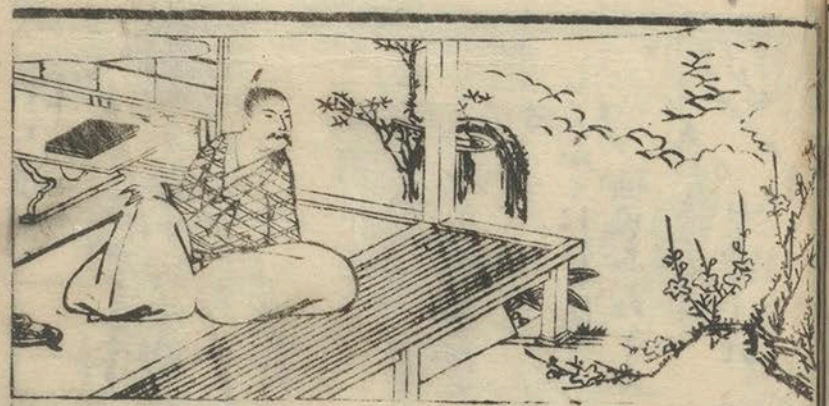
我ありと
ひとの
しるらめや
なにわの
こやの
あしのかりね

と詠しかば
其ころ
かの
國基
甚
貧
しくて
侘
しき
ありさまを
後
不
合
に
思
ひ
給
ひて
屋
敷
を
あたへ
給
ひ
ける
と
ぞ



森擬法師

わの
字
の
ごとく
うつくしう
ふとりも
よからうと
人
もいふなり





せーまふ
なろろ
我
身
よふ
いろぶよ
ろろれ
うろよ
花のもとは
小野小町

千代女

大石そみ代女そのち金沢
北枝のち乃女尼剃髪俳徳
風氏乃妻おうま八幸一多
俤うつ波の松見そ小
くうく到盤一日夜を鐘
勧うつ大抵乃鐘乃ごと
そのうち汲水を汲うち多捕の
きおいを視バ
いつふかくにたくみ
捕のそこねきを多
みたまら緑を
はもやこれ
と汲よて涙ぐみこそ



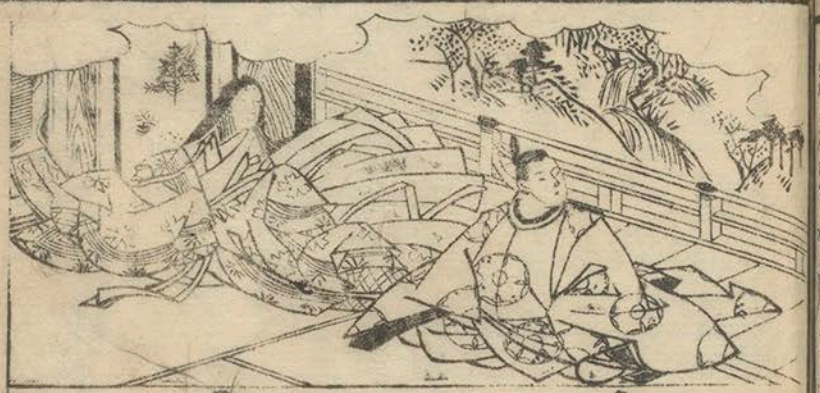
蝉丸

まもやこの
幻も
叫ぶ
を
いつ絶てい
志賀もおうみも
あふさかの関





泰議簪
和田の
八十
嶋
うち
こぎ出ぬ
人まつげよ
あま乃釣舟

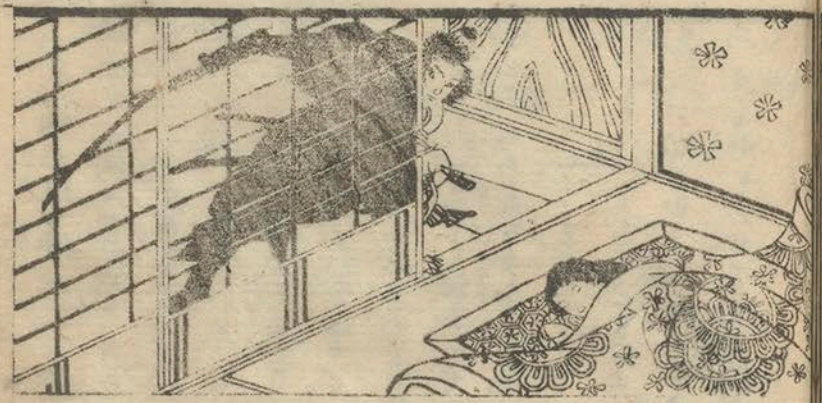




陽成院
きくだ釈の
ごとうる
おうふの川
をそをりて
測と成ねる



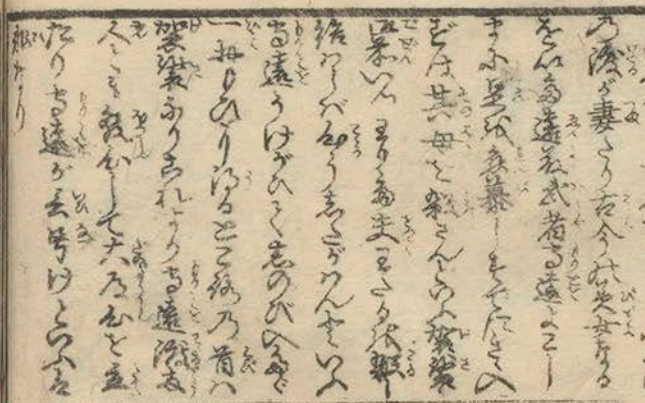
僧正遍昭
天津風
雲のかよひぢ
吹とぢよ
乙女の
すがたしばしも
とどめむ





光孝天皇

君がため
春の野に
出でてぞ摘む
我衣手に
雪は降りつつ





河原左大臣

みちのくの
しのぶもぢずり
誰ゆえに
乱れそめにし
我ならなくに







伊賀局

伊賀局と藤壺侍ること久しき所也左右なく里居も出来ず侍女院より仕へしてあるう吉野山より桜二枝ばかりをおくれるにつけて松虫の歌をしきりく歩そうして女院を慰めまいらせんとの心ばへなるべし



萩原殿の朝臣

住乃江も
きこゆる
ふるさと
なるさえや
夢のかよひち
人もよぐらん



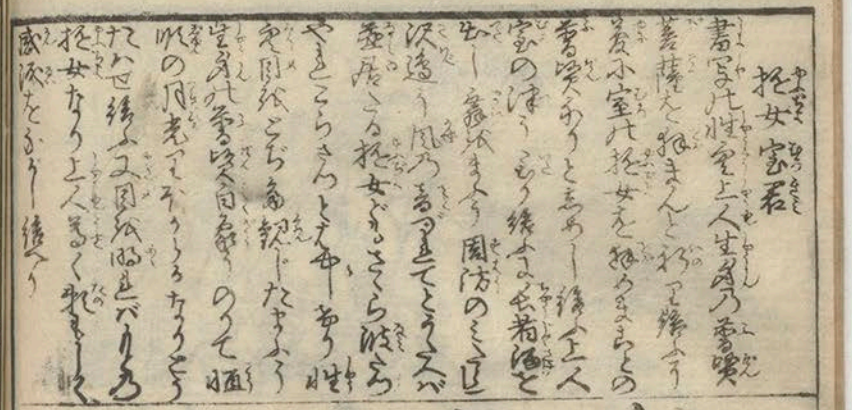
伊勢物語

難波ぐさみだれつゝ
あいだも
あはでこのよを
すぐすなよ










文屋康秀
吹くからに秋の
くさきの
しをれ
むべ山風を
あらしといふ
らん




大江千里
月見れば
ちぢに
物こそ
かなしけれ
わが
ひとつの
秋にはあらの
秋ど

曲水乃宴

曲水とらくるハ弥生巳の日又人詩人あまたこゝに多盃をとゝようふかー其盃数多つれ中う行を流を緑ド酒杯数多あり顕宗天皇えん上の巳乃日後苑之新年ちうう曲みれ宴を行かり給ふ園の世よりそ出ぬ代乃たのしみ風流乃いる事あり貴家の文章にも多く撰へらるとうりうことも幽玄乃極びとぞくぶんえん





落家

おのづとびいぬさもとうとあんど多向山りみぐれみすき神乃まふく



三條右大臣

名のおさうあふさうの山乃はな秋つ人よもれ多ふれよりもぐる





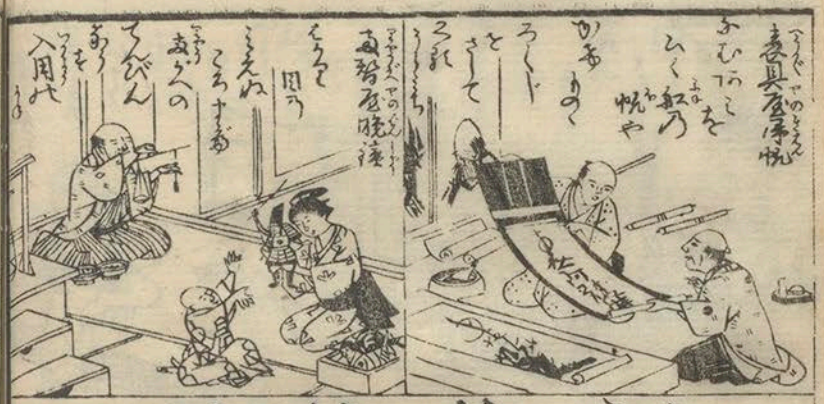
貞信公

小倉山
峯のもみぢ
葉
心あらば
今ひとたびの
御幸またなん



中納言兼輔

見つゝ戀
ふるの系
ふるて
ふかき
ふぢみ川
いつゝきそう
ゑしかうらん





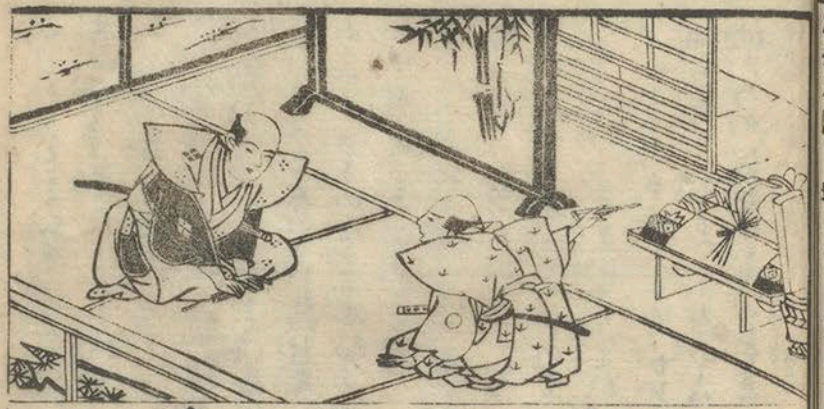

源宰相頼政
みさゝはそぞろびしさ
はさうある
人めも草もよもぎふと
おもふらんのみあれの


九河間行頓
仏にてふ
おもてやおろし
袖名乃
をれまでいやる
もゝぎくれた

婚礼仕用乃次第

○婚約整ひ為ば互ひに取替せ
契約書ようの結納の祝儀をとゝの
ひ招うたのくらゐハそれぞれ
為ふさゝ〻ばそこゝろあくま
婦ゆくゝくさま〻乃礼なり
むこハ〻へと書ようと代々
結納と書くべきなりかゆひく
これら我其あら陣ハ上巻ハ七
巻の七種中より巻之弐巻下ハ
三巻の二巻くるべし男へも壱乃
国綴ある者ふうろめへも小紙摺
さくふ行のまも其いろ限わ多う
きつけゞ〻男よりも女へ
祝義同様くるべし女ようまた
ゝをつけ〻り物もべうゆう







坂上是則

朝ぼらけ有明の月をみれまぞよしのゝさとに降る雪



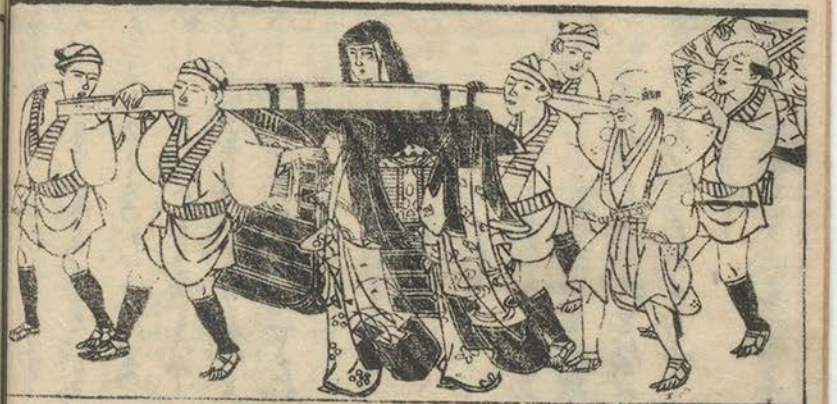
春道列樹

みねの風の
いけるれ
もみぢ
をも
おぐら
なるへりみぢ
なりけり



紀友則

久かたの
ひかりの
のどけき
春の日に
しづ心なく
花のちるらん



蔵六奥風

誰松かも
きれ
人うえ
せむ
たろさを
多かの
松もむろ
友なろれくよ





紀貫之

人もいさ
心も
しらそ
ぬる
さくら
花そむろ
香ふにほひる





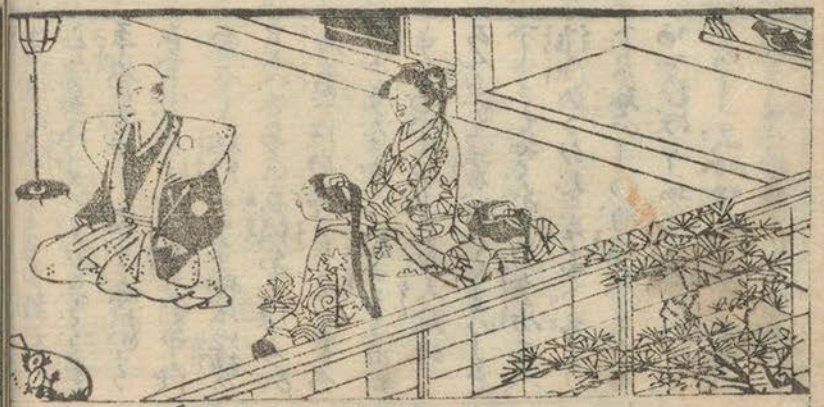
清原深養父

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに
月やどるらん



文屋朝康

吹く風は
露をし乱る
秋の野を
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける



右近
うこん
うろ〳〵
うろ〳〵
なくとバ
なくとば
ちうひ
ちうひ
てし
てし
人乃者ハ
人乃者ハ
おしへ
おしへ
なるふ
なるふ



春議等
春議等
ゐさち
ゐさち
乃
乃
をみ
をみ
ゐの
ゐの
ゐの



平氏盛
恋ゆえに
出よう
ござる
あひる
物や物かを
人乃とかそ



玉生忠見
名をとて
ござる名を
ござる
三よ
人志れぬ
おもひかな

ほんにひさげにろーねひさげ
よう引るへようねひさげろうろー
ゑゝ我夫ろうひさく絞ーねひさげ
ほんーさ絞ようろうさく絞ーねひさげ
ろ夫と嫁のろうろ
ねんと嫁えなげる二勅吹ゑゑ
勅人ゝゝ勅ゝゝさその垂と下
へゑゝーまろふ中ゝ垂をとて
二勅のんで嫁うさす嫁いさき
んろろうろ下ゝゝゝ垂
ろうろうあげろろんのんき勅人
さろ勅ろろゑんでおそむくと
ふしみ後乃まみびたろうむ
ろゝへゑんべー
ろそ垂ーーハ垂そそそてゝそ
へーー夫ハ嫁ろう物系のゝ絞

そろべーゝ垂ろういろくゝ酒系
ゝゝ垂ろてゝろゑハ男系をるらく
とれゞ大明ゞろう出ろ乃ろを
勅ろる人ろう男くゞ出べー
○足ようろうろろうろれんぎん
ざんをゝゝゑ雑黄を出ーゝ垂
をてゝめ酒ゑゝんとそべー
○勅人ゝゝぐゑ名ろるゝ
をとべー
○男人乃ろ和勅人乃ゝくを
りろゝゑろんろゑくゑろべーゆゑ
ゑ婚れろ絵の男絵ゝゝをろ
お夏のれてゝくへろべ先祖か
ゑく猿くろいるゝでれ吉凶
をおさむろ系ゑれようく
男ろろんゑ垂ーー



七夕彩色ぐさ



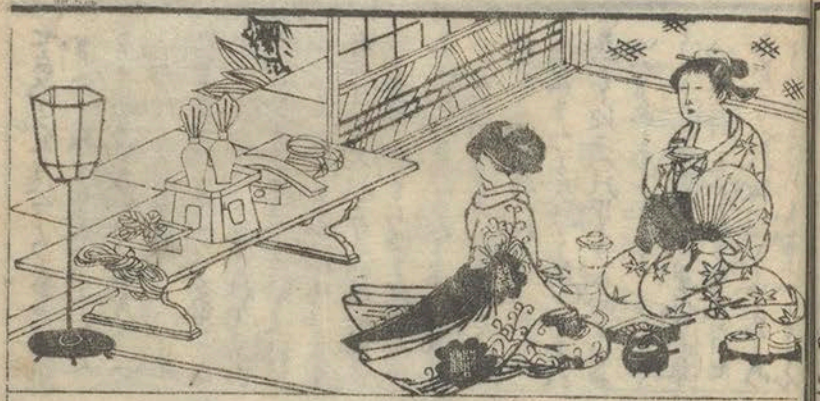
清原元輔

契きれ
くみ
袖と
ちぎりをく
末の松山
なみこさじとは



中納言敦忠

あひ見ての
後の心
うら
なげきは
むかしも
おもはざりけり

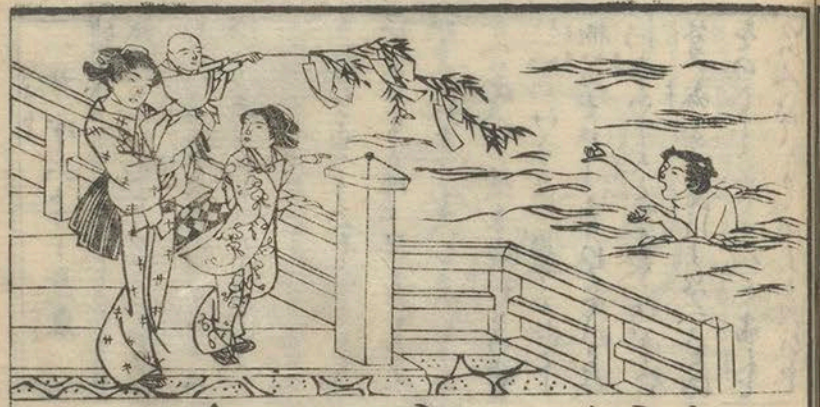


○星やそふ祭り終せる中乃緒の
○星や今ちかひくらんおとこ共
○七夕乃きよみさひ今そうい
○あぐら舟乃ふねいくそみて
○織女乃きれの袂そうれわ
○四くさくも星乃数ほとそのぐ分
○めぐろの二ろのやうなのきれ
○七夕をそうそみそうこそ
○漫うぬ数つきくそ天乃
わくせんこそうらく

中納言勲
功の車乃
ゆくをして
なくいと
中くゝみ
人をも
身とも
うらみぢ



謙徳公
君とも
いつべき
人も十
かもかな
身のいろ
なるぬるみ
なるぬるみ





恵参法師
八重霧
たゞまろ
やゝのひ
さしきふ
人ぞえし
秋は来にけり

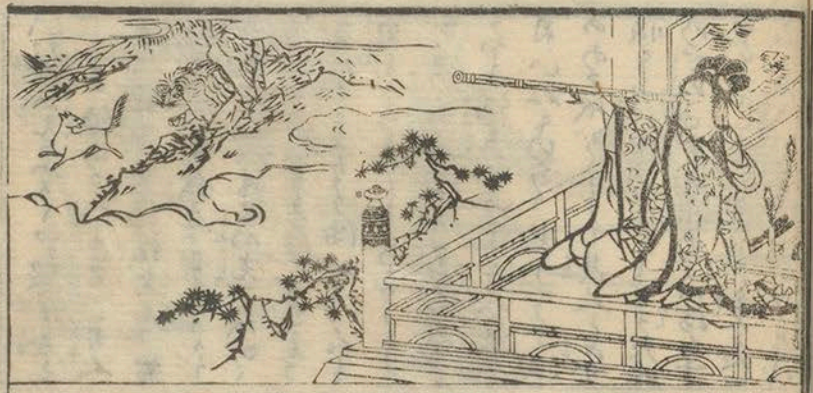


置秋好忠
ゆふされと
まつる
ふる人
のちをとし
約束も
あらぬ恋のこちうふ

我んひとりみそそ[illegible]
そしらぬ会をつ[illegible]
にけ[illegible]
小紫[illegible]
もの[illegible]



源氏之
風をつゝみ
君はな
とのゝ
ぐけ
物を
ぬりふ



大中臣能宣朝臣
御垣もる
衛士の
たく
夜
ひるは
もの







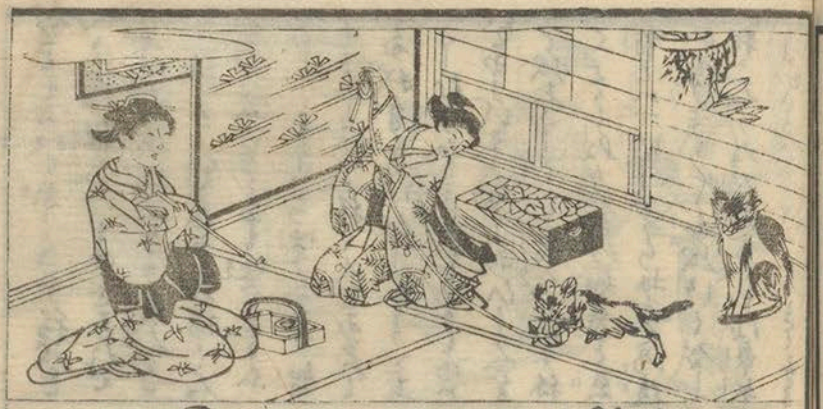
後朱雀院御製

君をおもひ
ねられぬ
今さへや
もぐさも
おもひ
あるらん



後冷泉院御製

ちぎりおきし
させもが
つゆを
いのちに
あはんとは







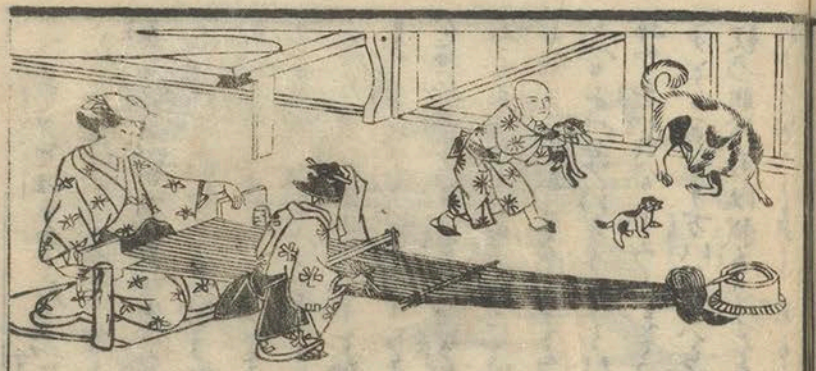




大納言公任
滝乃音は
たえて
久しく
なりぬれど
名こそ
流れて
なほ
聞こえけれ



儀同三司母
忘れじの
行末まではかたければ
今日を限りの
命ともがな











赤漆門
屋をうつす
稲ふ
拍を
ひよふけるかふくまでの
月をみるうふ



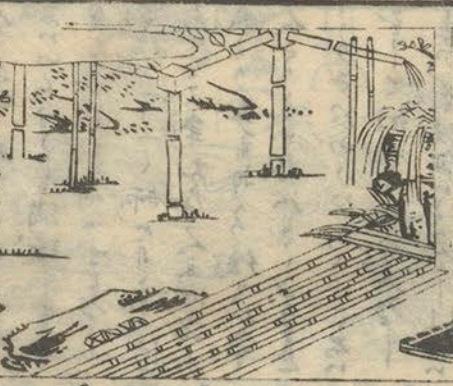
太二位
有るゝ
いかの
そ系
風ふけバ
いそうよ人と
ゝを
ぬやいをれ




侍従大納
いかへの
ろれ
そやこの
八重桜
九重
匂ひぬるふ


小式部内侍
大江山
いくのの
ふみもみず
天の
はしだて











相模





○琴の起は中古神農氏の人をかりたまふ日本にては天孫ひこほゝでみの命より今はやく絶ふ

○琴は三絃箏ともに一調子にてうしおせ

○琴の糸は三絃線の一番太きを用ひ

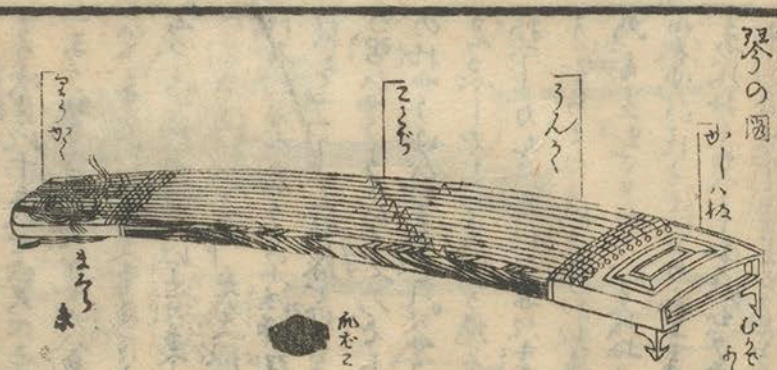
○二ことの調子は琴の二絃は三絃線の一番太きを用ひ

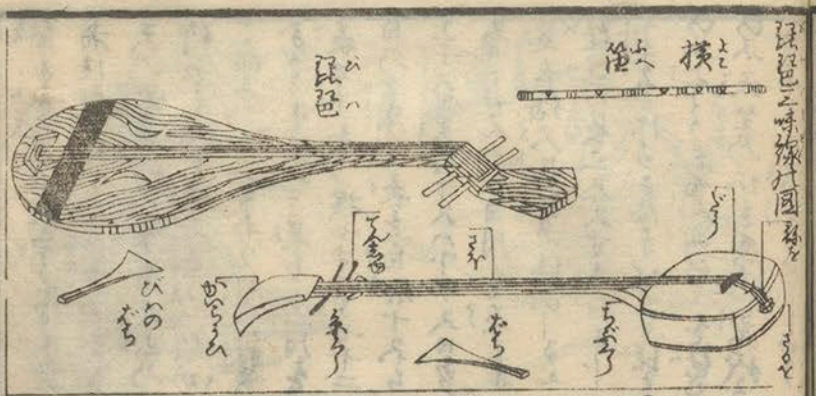
○糸の数は五糸なれども六糸七糸の琴もあり

○糸を張るには糸ごまを用ひ

○糸の名は一の糸二の糸三の糸と数をもつて次第をしるす

琴の図


ことぢ
ことぢ
ことぢ



三味線の図

ようの次第は十九八七六五四三二一あの甘き辛き酸ハ七九八分ひきあうハにハ甘く入ぜーてもろーかぜ地さきハ辛分多ぐー

○三味線といふ時ハ必ず二挺の事なり石村検校ハ法師琵琶をもつて三味線と名づくるの説ひやうくひく人のぐちのわかうゆびづかひを見わけるべーだちなり此両ツの事をおぼべーカを入るればなるもの也

うぐいすの声を聞ては春の来るをしり蛍の光を見ては夏の夜の月を

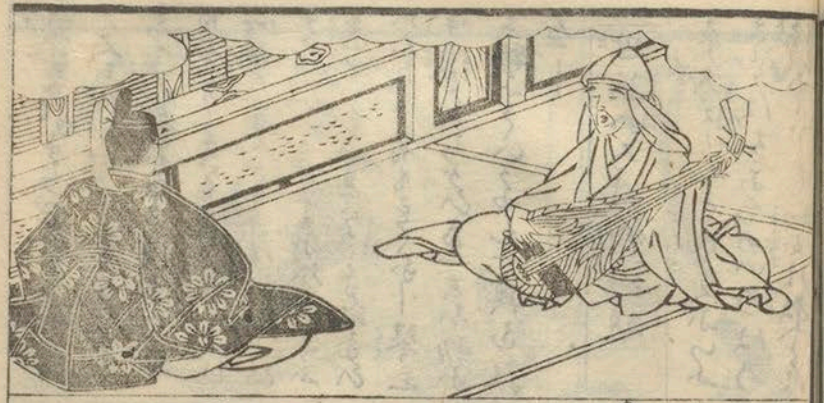


三絃院



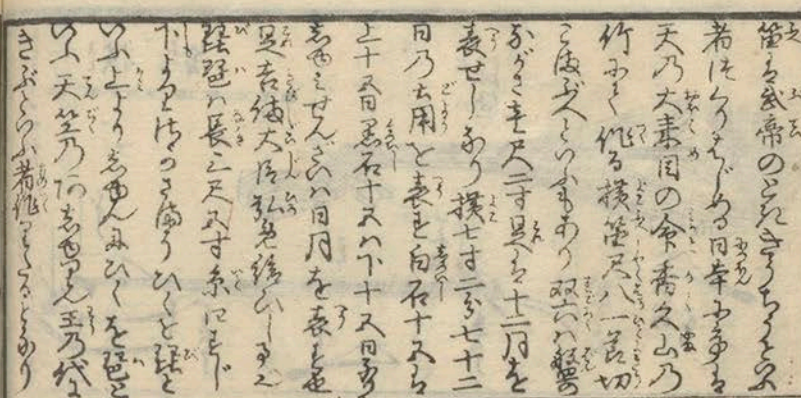
雅園法師

うぐひすの
三宝乃
山のよも
梨を
まつさも川乃
みきなるかり










い
ろ
は


前中納言匡房卿
名所
さくら
咲み
ありとやまの
こしもあるへん


ねまも
社の
かけや
たもと
たのみ
まてきく
神国親孝紀行

世話いろは新綱


に
ほ
へ
源後朝の
うちけり
そう人と
せんや
山
抽後
そ事しう後とも
いのち抽を


と
ち
り
義家碁後
契をこ
させ
もが
露と
命て
あとれおくり
杜もいねめり

ぬ

る

を

わ

か

よ





源義家

浅ましき
ものは
乞食の関守







左京大夫顕輔

秋風の
ふきにし日より
秋萩の
枝もたわわに
実のなりにけり

ら

む

う


物おもひ
けさは
みぐれて
ものさびし
おもふ人
まつ
待賢門院堀川

の

れ


淺徳大寺左大臣
なにつるに
かさと
むれい
まで有明の
月そのこる







道風法師



おりひるも
そでも
命も
なるも
うきふしは
かみぞ
なるらん

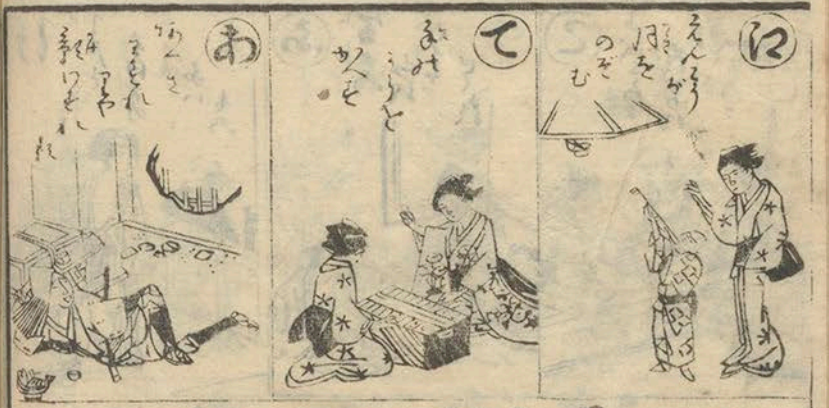








望月長安後成
世乃中よ
そらそそ
ふ
なのひらも
山のおくにも
棄うきるほ


(い)
えんそうが
ほうを
のぞむ
(ろ)
(は)


ふぐらいのうえそだけのかそん
ふぐくへ
ものこの
ぢねや
思えもん
うしとみー
せそ
今もこひしこと


(に)
(ほ)
(へ)


後恵法師
疾もすぐ
物そよ
こゑはい
ぬやまの
国ひま
さへ
ほと
ふるさと

め



み



し



ゑ



ひ



も



西行法師

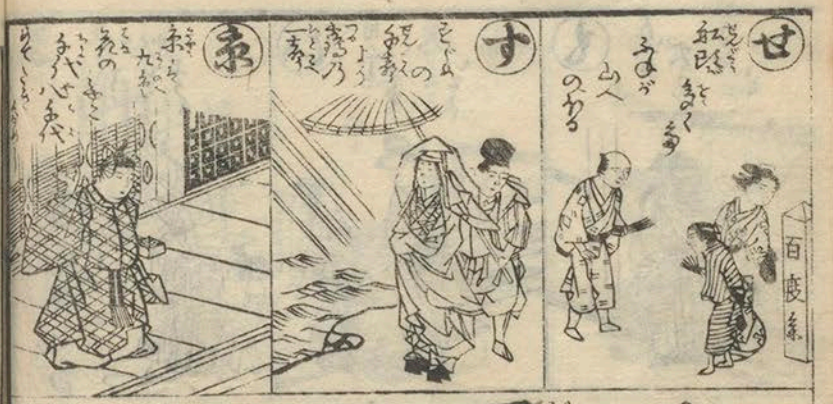
ふきとぢよ
月やども
もりとは
ゆるせかぜ
ちりぐさなる
わがやどの



蓮生法師

もゝさとも
ひね
柿の葉
雪ふらしぐる
秋のくれ




せ
百度参
す
そ


無きそうべき
ほくしてや
身を
一筋ゆへ
乃
ろ称
あみ
難波江の
宮加門流り


三十六歌仙
右 紀貫之
右 在原業平朝臣
左 僧正遍昭


式子内親王
玉ゝ結よそしるかハ
そねるこゝろの
あふるゝ
もそを


右 大伴家持
左 紀友則
右 伊勢
左 五条大后宮
左 紀伊内侍
右 僧都隆尊
左 大原や
かつ
ぬれ
袖ぐ
とまの
旦那
敦賀
法華
経
法華の持者
常ならぐに
なくや
霜夜
乃
さむしろ
衣かたしき
ひとりかも
寝ん


二條院讃岐
我袖も
しほひろ
見へぬ沖の
石ゝ
人こそ
しら
かわくまも
なし


源會右大臣
世中を
はしなき
滿こぐ
のまれとぶ
ほるで
あま


泰義座種
みよし野の
山の桜風
はよ更て
ふるさとを
むく
哀うなり
菜大僧正慈圓
おもかわく
うき世の
民う
おほふ
我うき
松ゐ
をみそあけ



















三位家隆

風ぬるゝ
小門乃
ゆふ秋ハ
みそぎそ夏の
もの
なりける









後鳥羽院

人もをし
人もうら
めしあぢ
きなく
よをなにか
つもふらん





右 義家公 弓矢を
えらび給ふ
ところ



左 源公忠朝臣
いとせめて
こひねがふ
ところ



右 主は慈悲
ちからなく
さやうに
おぼしめす
ところ

順徳院

百敷や
ふるき軒端の
しのぶにも
なほあまりある
むかしなりけり



百人一首よみ哥傳

○百人一首ひやくにんいつしゅ○天智てんぢ○持統天皇じとうてんわう○柿本人麿かきのもとのひとまろ○法師ほうし○元明げんめい○阿倍仲麿あべのなかまろ○猿丸大夫さるまるだいふ○文屋ふんや○左京大夫さきやうだいふ○喜撰きせん○小野小町おのこまち○蟬丸せみまる○僧正遍昭そうじやうへんぜう○参議篁さんぎたかむら○在原業平ありはらなりひら○藤原敏行ふぢはらとしゆき○伊勢いせ○藤原清正ふぢはらきよただ○藤原興風ふぢはらおきかぜ○紀貫之きのつらゆき○清原深養父きよはらふかやぶ○文屋朝康ふんやあさやす○右大将道綱母うだいしやうみちつなのはゝ○中納言朝忠ちうなごんあさただ○謙徳公けんとくこう○曽禰好忠そねのよしただ○恵慶法師えぎやうほうし○源重之みなもとのしげゆき○大中臣能宣おほなかとみのよしのぶ○清原元輔きよはらのもとすけ○藤原義孝ふぢはらよしたか○藤原実方ふぢはらさねかた○藤原道信ふぢはらみちのぶ○右近うこん○参議等さんぎひとし○平兼盛たひらかねもり○壬生忠見みぶのたゞみ○清原諸実きよはらもろざね○藤原敦忠ふぢはらあつただ○藤原高光ふぢはらたかみつ○藤原朝光ふぢはらあさみつ○源宗于みなもとのむねゆき○源信明みなもとのさねあきら○藤原伊尹ふぢはらこれまさ○藤原元真ふぢはらもとざね○小野小町おのこまち○藤原道綱母ふぢはらみちつなのはゝ○藤原道雅ふぢはらみちまさ○藤原公任ふぢはらきんたう○藤原定頼ふぢはらさだより○藤原長能ふぢはらながよし○藤原実定ふぢはらさねさだ○藤原俊成ふぢはらとしなり○藤原清輔ふぢはらきよすけ○俊恵法師しゆんえほうし○西行法師さいぎやうほうし○寂蓮法師じやくれんほうし○皇嘉門院別当くわうかもんゐんのべつたう○式子内親王しきしないしんわう○殷富門院大輔いんぷもんゐんのたいふ○後徳大寺左大臣ごとくだいじのさだいじん○道因法師どういんほうし○皇太后宮大夫俊成女くわうたいこうぐうのたいふしゆんせいのむすめ○藤原良経ふぢはらよしつね○藤原定家ふぢはらさだいへ○従二位家隆じゆにゐいへたか○後鳥羽院ごとばゐん○順徳院じゅんとくゐん○鎌倉右大将かまくらうだいしやう○参議雅経さんぎまさつね○前大僧正慈円さきのだいそうじやうじゑん○入道前太政大臣にふだうさきのだいじやうだいじん○権中納言定家ごんちうなごんさだいへ○従二位家隆じゆにゐいへたか○権中納言定家ごんちうなごんさだいへ○藤原家衡ふぢはらいへひら○藤原清衡ふぢはらきよひら○参議雅経さんぎまさつね○法性寺入道前関白太政大臣ほつしやうじにふだうさきのくわんぱくだいじやうだいじん○従二位家隆じゆにゐいへたか○権中納言定家ごんちうなごんさだいへ○権中納言定家ごんちうなごんさだいへ○従二位家隆じゆにゐいへたか○入道前関白太政大臣にふだうさきのくわんぱくだいじやうだいじん○後京極摂政前太政大臣ごきやうごくせつしやうさきのだいじやうだいじん○従二位家隆じゆにゐいへたか○藤原良経ふぢはらよしつね○藤原定家ふぢはらさだいへ

男女相性事

男女	男水 女金	男木 女火	男木 女土	男木 女水	男火 女木	男火 女土	男火 女金	男土 女水	男土 女火	男金 女木	男金 女水	男金 女火	男水 女土
	大吉	大吉	吉	大吉	大吉	大悪	悪	吉	大吉	大悪	大吉	大悪	大悪



五性相生名頭字

水性

宗趣佐清仏善悪市彩利周夏
孫改浅小化予当常助玄次之
四七秀松勝姓素時倉雪接石

木性

義後赤覚雅菊深元喜勁撞春
之九金限数之克岩牛的登亜
幸近須署寸医言光後七琴仲

火性

学福弥八白武文門万云堂
氏寸体兵平衛義海仰百業政
森房格芳経波筆ぬ本未末

金性

悪慈善乙由学栄多女宇又和
要用庫寅ら侍西就炎雲云
義沙晃好昭延毛雪路真里

土性

愛徳志林理良浜長大六
偽左堂則理治忠重丈条隆羽
称承礼位通京中竹滅律力采

十二月之異名

正月を　陸づき　七月を　文づき
二月を　きさらぎ　八月を　葉づき
三月を　やよひ　九月を　紅もづき
四月を　うづき　十月を　神もづき
五月を　さつき　十一月を　霜月
六月を　みなづき　十二月を　三ふ月

跡見学園女子大学短期大学部図書館
a0010458149a

天保十三壬寅歳
初春再刻

54757

諸國發行書林

紀伊國屋平右エ門
紀伊國屋治兵エ門
總國屋孫右エ門
隅屋治右エ門
庚屋清二
中張屋善右
太閤屋六藏
多賀屋治助
勢州屋市助
勢州屋善右エ門
須原屋茂兵衛
秋田屋太右エ門

六十圖

男女の行の年行のそと
行の性るることをるそ
今年らの〳〵るぞ
いやうさとその人の
まのふかどあと〳〵
おと年のおふくろ
まる人の年性と
○子性魂をもる寄
お九ふ史この
土一ウ七ス今を
○寄水尊をもる教
子ハ丑寅の
卯ハ文殊る辰巳
午未申こそ大日
酉ハぞうで成亥ぞ



54757

天保十三壬寅歳
初春再刻

諸國發行書林

紀伊國屋平右エ門
伊勢屋孫右エ門
丁子屋清二郎
中嶋屋善右エ門
太田屋六藏
多賀屋治郎
丁子屋市郎右エ門
須原屋茂右エ門
秋田屋太右エ門

紀伊國屋總四郎
伊勢屋孫右エ門
丁子屋清二郎
中嶋屋善右エ門
太田屋六藏
多賀屋治郎
丁子屋市郎右エ門
須原屋茂右エ門
秋田屋太右エ門

六十圖

男女の位の年行のえと
行の性なることをくるるそ
今年ちのくるるふ子い
いぬとうさるとそのんの
きのふかどあとへくる
ぼ年のおふくるおを
ほんの年性と定むる
○子性鼠をもる奇
お九うふ丈こうの少く
士一ウ七ス今をふみ
ゆうあれ
○寺水尊をもる秋
子八ふくは丑寅のおこころ
辰卯八文殊るう辰巳
不動そ
午勢至 未申こそ大日
酉八うどうで成亥ぐこそ

